

遠見山荘建設回想記

第十一代幹事長
井 上 和 男

早いもので市大体育会も、本年で十五周年を迎えるという。私が卒業してからもう数年がたったとは、真に夢のようだ。体育会の組織づくりや、学内外の活動に没頭していたことが、昨日のこのように、あざやかに浮び上ってくる。

私が体育会の役員として活動を始めたのは、二回生になった春だった。大学紛争の真っ只中で入学した市大は、前年十一月まで授業も行なわれず、荒廃の中にあった。体育クラブ、文化サークル等も分裂や消滅を重ね、活動はほとんどできる状態ではなかった。もちろん体育会とて例外ではなかった。ボート祭、大学祭等の大学行事はすべて中止されており、体育会としては、まずこれらを再開させることが、当面の目標であった。九代小野幹事長、十代竹内幹事長や、また応援団とともに、ボート祭、三商大戦、大学祭と一年間の大きなブランクを乗り越えて、まがりなりにも成功させていくことができた。

その頃である、体育会が自馬に土地を購入しており、山小屋建設の計画を持っているのを知ったことは、残念ながらこの計画も資金問題や、大学紛争の影響で断ち切れていた。ロッカーの中には、土地売買契約書のコピーや設計図、その他少々の資料が残されていた。それにより、去る四十一年二月、長野県白馬村に三五八坪(登記上)の土地を購入していることがわかったがその他詳しいことは不明だった。登記簿に名前が記載されている当時の体育会々長、小林繁先生や磯部幹事長に連絡をとったり、学生部にあたったりしていくうちに、ようやく詳細がわかってきた。残念なことに、土地権利書、土地売買契約書等重要な書類は、学生部に預けてあったのだが、三号館封鎖の時、心ない活動家学生の為、その他学生部書類と共に紛失したのである。しかし山小屋建設には、それらの書類が無くても建てられることがわかり、安堵したのである。

そうこうするうち、四十五年十二月信州戸狩でスキースクールが開催された帰りに、現地視察ということで、自馬へ行く機会があった。雪の降る凍えるような夜、単身神城に着いたことを、ありありと覚えている。そこで土地購入時、お世話になった太田旅館をようやく捜しあて、宿泊をお願いした。そこでは、市大体育会役員ということで思わぬ歓迎を受け、酒を酌み交しながら、主人、下川辰男氏やおじいさんの三郎氏から、土地購入時のいきさつを聞かせていただいた。当時の磯部幹事長らが数日泊り込みで土地を探し廻れた苦労話や、ようやく開発が始まった現地の様子などを、夜が更けるのも忘れて語り合ううち、何とかしてこの地に、山小屋を、我々の手で建てたいという気持ちが湧き起ったのである。その後、数度現地へ足を運ぶとともに、四十六年七月、立山から合宿帰りのスキー部の協力をえて、土地のクイ打ちや伐採を行うとともに、「大阪市立大学体育会山の家建設予定地」という大きな看板をあげて、建設の意志を示したのである。

そうはいっても、まず第一に資金が問題である。土地購入時に作った青写真では、建設費に一、〇〇〇万円程度必要である。これを数年来より大学当局に要求してきたのであるが、反応は皆無の状態であった。理由には、「学内でさえ十分な施設が整っていないのに、学外にまではとても手がまわらない」ということや、「学内の合宿所や寮でさえ管理がいき届かないのに、ましてや学外の、それも長野県の山奥にまではとても無理だ。赤軍の浅間山荘のようになればどうする」と言われ、この計画は眉つばものにされていた。

四十七年春、このように大学当局は相手にしてくれないので、当初予定の規模の山の家建設はどうも無理だと断念し、新たな計画をたてたのである。そのころ現地では、開発会社が入り大規模なスキー場開発や、別荘地計画が進んでくるにつれ、反面地元から建築規制や水道の給水制限等の問題が年を追うことに厳しくなってきた。こうした状況を見るにつれ、早急に山小屋を建設しなければ年々難かしくなると判断し、体育会独自でどんなに小さくともいい、とにかく既得権を得るためにも、来年度に山小屋を完成させる、その後予算要求等をおこなって増築すればいいではないかと決定した。建設費を一五〇万円とし、体育会役員や、運動クラブの労働奉仕を加えて、何とか完成させると計画したものの、資金調達が思うようにはかどらなかった。先進諸氏から一〇万円づつ借金してまわろうかという案も出たぐらいである。その当時、大学に提出した次のような文書が残っている。

山の家建設について

市大の運動施設は、学内に関しては、新体育館、合宿所等漸時整備されてきたが、学外運動施設はまだ皆無である。しかし、各クラブとも年二～三回程度の学外合宿を行っており、その宿泊費だけでも多額にのぼり、クラブ員の経済を圧迫している。このような点から学外合宿所の必要性を痛感し去る四〇年、自馬に五〇〇坪の土地を購入し、山の家建設準備を進め、毎年学校当局一、〇〇〇万円程度の予算要求をしてきたがいっこうに計画が具体化せず全く遺憾である。大学の山の家を建てるということで、地元の理解を得土地をあっ旋してもらったのだが実現の見込みもなく土地はそのまま放置されている。一方その付近五竜遠見スキー場を中心に、三年前東京から開発会社が入り、大規模なスキー場開発、別荘地分譲などを行っている。来年度には遠見尾根までロープウェイが完成し、すぐ近くの八方尾根スキー場と並ぶようなスキー場になる見込みである。付近一帯が、次々と開発されていくのに市大の土地はそのままという状態は、土地を売っていただいた方や、あっ旋していただいた方の心証を害している。

以上のような理由で、体育会は字校当局に一、〇〇〇万円の予算を要求していくとともに、それと並行して、独自(クラブの奉仕等で小規模ながら、山小屋を建設する計画をたて、来年度完成をめざして準備をしております。建設費一五〇万円を体育会だけで調達することは非常に困難ですので、学校側の積極的な援助を希望いたします。

大阪市立大学体育会

四十七年七月、九月、十二月と度々現地へ行き、水道の件等を地元と打ち合わせるとともに、現地の酒井公務店紹介してもらった。工務店主、酒井敦志氏に今までの経過や、山小屋建設の趣旨を話したところ大いに賛同してもらい、全面的に協力していただけることになった。しかし、「一五〇万円の予算ではあまりにも貧弱なものしかできない。自然条件の厳しい自馬では、最低三〇〇万円位の金をかけなければだめだ」というアドバイスにもう一度資金計画を練り直したのである。資金調達の為、デューク・エイセスのコンサートを行い、スキースクール等を計画し、また体育会諸経費の大幅節約等苦勞に苦勞を重ねたのである。とくにデューク・エイセスのコンサートは切符の売れゆきが悪く、あわや赤字かとも思われたが、役員一同奮起して売りまくり、何とか収益をあげることができた。こうして資金を集め、どうにか二〇〇万円近くを調達する見込みができた。

目標の三〇〇万円には達しないものの、来年度雪融けとともに着工という予定をたて、二十五名程度収容の山小屋の原案を作り、工務店の方で設計図や見積書を作成してもらったのは年も明けた四十八年一月だった。しかしでき上った見積は四六七万円と、とうてい不可能な金額になっていた。あわや断念かと思われたが、酒井氏に腹を割って相談し、何とか三〇〇万円程度で出来るように設計変更をお願いした。定員も二〇名に減し、省けるものはすべて省いた。資金の集まりぐあいもありのまま話し、不足分一〇〇万円の支払いを一年位待ってほしいとお願いした。我々学生の無理な願いを聞いていただき、また旅主、下川辰男氏の全面的応援のもとに、ようやく、四十八年三月待望の設計図が完成したのである。私も卒業を間近にひかえ、必死の思いであった。雪融けの五月には着工と決定し、山小屋建設担当に決っていた二年下級の藤井君に全面的にバトンタッチしたのである。

そのころようやく我々の気持が通じたのか、大学当局も乗り気になり、学生部美馬氏が現地へ足を運んで、我々の後押しをして下さった。そうするうち、大学後援会の人事移動をきっかけに、どういう訳か、山小屋建設の話がとり上げられ、予算がつくかもわからないという話がち上った。これは願ってもない話だと思い、卒業後も何度となく大学へ行き、幹部役員とともに学生部等と折衝し、また現地へは着工を少し待っていただけるよう連絡をとった。

夏になってようやく後援会からの援助額が決定し、定員三〇名、総額五八〇万円で、体育会と後援会の共同建設と決った。直ちに設計図を作り直し、当初から考えると夢のような山荘(もう山小屋ではない)の図面ができ上ったのである。また美馬氏ら大学職員の方々の努力により、地元飯田区との細かな調整等が着々と進んだ。こうして四十八年八月、土音高らかに工事が始まった。その間も数度現地へ足を運び、太田旅館からも「隣の家の人よりもよく来る」などとからかわれ、感心されたものである。

秋も深まった四十八年十一月四日、おりからの石油危機に端を発した諸物暴騰にもめげず、念願の山荘が完成し、体育会役員、先輩諸氏、大学後援会その他地元の方々が一同に会し、成大な竣工式が起なわれた。体育会にとっては、足かけ八年間を費やした創立以来最大の事業であった。なお完成と同時に、大学へ土地・建物の寄付がおこなわれ、市大にとっても唯一の、学生の為の学外施設となったのである。

最後に、建設にあたって無知な我々のよきアドバイザーであり、協力者であった工務店主・酒井敦志氏が、四十九年四月不慮の急死をされたことを記しておく。氏の冥福を祈るとともに、体育会の今後の発展を期待したい。

名 称 大阪市立大学遠見山荘

所在地 長野県北安曇郡自馬村神城二二二〇三

電 話 〇二六一七(五)二九三一

四十九年四月より 小生当山荘の住人となり、管理・運営をしていくことになった。学生時代の思い出としてのこの山荘を末え永く守っていく所存である。その後、小規模ながらも増築や、周辺整備を行い、年々立派な態様を整のえて来ている。卒業生諸氏も、どうか気楽に利用していただきたい。

[体育会、応援団創立15周年記念誌「翔」 昭和50年11月発行 より]